

学会広報

戦争を知らない世代へ②⑨広島編

広島の炎

——三十二年めの証言——

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊟

広島の炎——三十二年めの証言

昭和52年4月15日 初版第1刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話 03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

900

落丁・乱丁本はお取り換え致します

発刊の辞

「生き残って三十二年——原体験の継承は、このままではもう限界を超えたゴムのように、切れてしまいそうだ。」ヒロシマの声は、かつてない緊迫感に満ちている。

昨年、原爆慰霊碑に名を加えた人は二千百五十九人。今年もまた、証言者の声が消えている。こうしたなかで、広島県青年部は今年、五冊目の被爆体験集を発刊することができた。

「広島のことろ——二十九年」(昭和四十九年八月刊)からはじまった原体験の継承運動は「原爆を知らない」若者によって、地道に取材がつづけられ、相次いで出版されてきたわけである。

今回、一人一人の話は淡々として、むしろ感情を抑えながらの訴えが多かった、との取材報告を聞いた。だが、その一言一言に込められた真実を見逃してはならないと思う。

継承運動は「流れ」それ自体であるがゆえに先輩から後輩、親から子、友から友へと真実が受け継がれなくてはならない。被爆体験集続刊の意義もまたそこにある。

巻を追って反響は大きく「私の被爆体験も聞いてほしい」「生き抜く勇気が沸いてきました。

平和の尊さを生涯語りつづけたと思う」など、継承運動に期待する市民の関心の深さを物語る投書が広島県反戦出版委員会に寄せられていた。

同反戦出版委員会の粘り強い活動が今、未来継承へ向けて、確かな流れとなっている事実を目の当たりにして、ヒロシマを語る友が一人でも多く増えたことに、勇気が沸き上がってくるのである。これからも継承の「流れ」をしっかりと受けとめつつ、それを奔流とし、平和の大河へと変える日まで、労作業の手を休めてはならないと思う。

昭和五十二年三月十日

創価学会青年部

広島県男子部長 小坂勝利

目次

発刊の辞

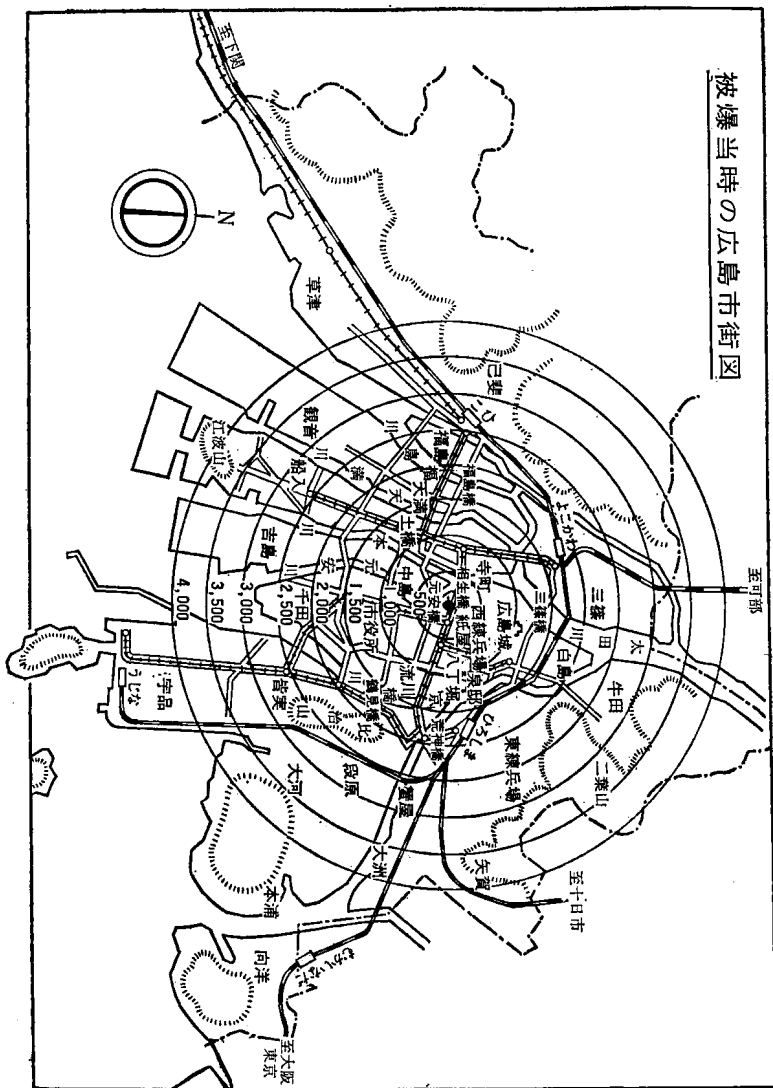
十二人の家族が七人に……………	村岡 博登	9
姉の死にやりきれない寂しさ……………	住居千恵子	14
変り果てた次兄の姿……………	小出 桂子	18
葬式まで出されていた私……………	田中 久代	22
被爆後も恐怖におののく……………	佐々木逸江	25
わき出すウジが憎い……………	山下 正巳	28
家族を奪った原爆……………	下井 露子	31
戦争なんてもうたくさん……………	松谷 勝江	35
中井君たちは皆全滅だノ……………	中井 タキ	39
それはお父ちゃんじゃない……………	桑原キクヨ	42

悔やしさに酒が……………	野間本謙男	46
焦土を歩いて……………	竹原 笙子	49
忘れられない光景……………	輝岡三代子	53
生涯平和の旗を掲げて……………	山本 愛子	56
母の胸の傷跡に恐怖を見た……………	古賀 侑子	59
修羅の巷をさまよう……………	森川ふじ江	62
奪われた私の健康体……………	大村ツルエ	67
やり場のない怒り……………	田島 忠美	71
家族八人を一度に失なつて……………	和田 稔	74
足首にくい込んだガラス片……………	楨原 文江	77
原爆を踏み越えて……………	平城 栄子	80
被爆後にはじまった苦闘……………	中田 静子	85
朝食の団らんを襲つた閃光……………	太田タカヨ	88
避難所での悲しい出来事……………	富永キヨミ	92
やり場のない怒りを胸に……………	香西 芳子	97
子孫に伝えたい被爆の姿……………	中田 新蔵	100

鶴見橋での惨事……………	西角	キヨ	103
私の見た『あの地獄の光景』……………	森	秀男	106
天井にはりついた作業着……………	中村	静枝	111
電車のなかで助かった私……………	木村千恵子		114
苦しかったあのころ……………	汲地キクエ		117
『今生きる被爆者』の使命……………	木村	悦子	121
飛行機から落ちた固りが……………	林	昌之	127
姉妹の絆を引き裂かれて……………	山下美恵子		130
もしや妹が帰ってくるのでは……………	大畠	満江	133
死をみつめた人生から生の人生へ……………	榊原	幸枝	137
思い返すあの『痛み』……………	岩地	輝明	143
銃後の悲惨を味わう……………	梶井	孝子	147
ねこがくる、ねこがくる……………	吉岡	少子	150

あとがき

被爆當時の広島市街図



広島の炎——三十二年めの証言

十二人の家族が七人に

村岡 博 登

当時二十二歳。十人兄妹の長男。両親と、安古市町の家に住んでいた。被爆により両親と妹、弟二人の計五人を失い、その日に爆心地付近へはいったため、第二次放射能を受けた。その後、原爆による症状はあまり出ていない。五十三歳。

炎の島 広島

私の家族は、当時、二十二歳の私を頭に十二人の大家族でした。私はそのころ、肋膜炎になって兵役免除になり、三河村（現在の広島市安古市中筋）の自宅で療養しておりました。

八月六日の日は、両親と二人の弟と妹が加古町に行っていました。警戒警報のサイレンが鳴ったのは、いつものように小さい兄弟たちと家のなかを掃除しようとしていたときでした。「また、

来たな」と思い、家の裏に行ってみました。すると、B 29 が一機飛んで来ます。ただ見送っていたら、広島の上空のほうで金箔のような物が、ひらひらと落ちていくのが見えました。何事もないのでそのまま眺めていると、突然、稲妻のような鋭い閃光が、ビカッと走ったのです。私は、直感的に「これは大変だ」と、小さい兄弟たちを防空壕に入れるため家のなかに飛び込みました。しかし、どこを捜しても一番下の二歳の妹が見つからないのです。怖くてどこかに隠れているのだらうと思うのですが、いくら呼んでも出てきません。もう一度家の裏に出てみようと思ったときでした。ものすごい爆風が襲ってきたのです。爆風によって胸がしめつけられ、その時の痛みは今でも忘れられません。壁はボロボロに落ち、フロ場の戸は開かなくなり、隣りの家では鴨居が折れていました。そうこうするうちに、やっと風呂釜の中で小さくなって、隠れていた一番下の妹を見つけたのです。ふと広島の上空を見ると、大きなキノコ型の雲が覆っていました。午前十時近くなったころ、近くの堤防を、衣服などほとんど着ていない、全身焼けただれて血まみれになった人たちが、やってきました。あまりのむごさに、声をかけることもできず、「こりゃあ、大変なことになった。父ちゃんや母ちゃんや弟たちは、大丈夫じゃろうか」と心配になり家を飛び出しました。

大芝公園（現在の交通公園）あたりまでいくと、そこらじゅうの竹藪という竹藪のなかに、たく

さんの人たちが、血だらけの姿で声もなく集まっていました。なかには全身が焼けただれた姿で、ふらりふらりと歩いている人もいます。なんとか崇徳中学（現在の崇徳高校）の前まで行き、そこで、これから火のなかを通っていくため頭から水をかぶりました。しかし、一面の火の海です。どこをどう通っていいかわからないので、山陽本線沿いに歩いてみようと思いきすと、以前勤めていた会社の人に会いました。最初はだれかわからないのです。それほどに焼けただれて、皮膚もぼろぼろになり、何ともひどいあります。一瞬私は、目を覆ってしまいました。持っていたふかしイモや乾パンなどの食べ物を、分け与え、別れました。

それから、やっとの思いで横川町までたどりついたので。見れば、あちらに一人こちらに一人と倒れています。防火用の水槽の中に頭を突っ込んでいる人もいます。線路沿いに、それがつづいており、私はこの世の出来事だとは思えません。横川橋のらんかんにはたきさんの人が、二つ折りになって倒れています。赤ん坊の丸焼けの死体もありました。母親も見捨てていったのでしょう。その時でした。黒い雨が降りだしたのです。最初は「へんな雨じゃの」としか思えませんでした。それでもかまわず、家族を捜して歩きました。土橋まで行ったとき、目の前に一人の男の人が倒れていました。二、三メートルくらいまで近づいたときです。突然ふらふらと立ち上がり「医者は、どっちじゃ」と聞くのでびっくりしました。てっきり私は死んでいると思って

いたのです。

それから、土橋から元県庁のあった加古町のほうへ回ったのですが、ちょうど元安川の橋まで行ったとき、学生らしい死体が川の両側を埋めていました。戦闘帽をかぶっていたために、髪が帽子の部分だけ残りあとは丸焼けで服もベルトだけしか残っていませんでした。いたる所で、「水をくれー、水ー、助けてくれー」と切れぎれの声が聞こえてきます。目の前で、水道の水が吹き出しているのも飲めないのです。私は、空カンに水をくみたくさんの人に、飲ませてあげました。それだけがやっとで、あとは治療をしてあげることさえできないのです。

しかたなく、そのままにして何時間も歩きましたが五人の家族のだれひとりとして、消息がつかめません。仕方なく、ひとまず帰ることにしました。

その夜、父と母たちが太田川を舟に乗ってきました。このころ、下の弟は、息をひきとり、もう一人の弟は、爆風で吹き飛ばされて川に落ち、結局行くえはわからなくなったそうです。弟が川に落ちたとき、父は全身火傷で重傷でしたが、すぐに飛び込んで、我が子を探し回ったということです。

母は、だれだかまったく判別がつかないほど顔がはれあがっていました。ただ、私たちをさがす声ではじめて母だとわかったほどです。その母も、ろくな治療も受けぬままに、その日のうち

に救護所となった鵬明小学校(現在の新和小学校)で死にました。妹は、救護所から家に帰ることができましたが、その日の午前一時ごろ、息を引き取りました。父もまた、八月中まで生きていましたが、青い水を吐いてとうとう死にました。

一度に三つのひつぎを並べ、最後に父の葬式を行ったのですが、その時はもう涙も出ませんでした。十二人もいた家族が一度に七人になってしまったのです。自分を除いては頼れるような兄妹もおらず、本当に途方にくれてしまいました。

一度に両親と三人の弟妹を失った私たちは、自分の将来の夢も奪われてしまいました。

十二引く五は七——けれども私の心は、けっして数字では割り切れるものではありません。私にとって、十二引く五は、どこまでも零なのです。

姉の死にやりきれない寂しさ

住居 千重子

皆実町の専売公社内で被爆。当時五人家族。嫁いでいた上の姉と下の姉は、商工会議所に勤務。横川の二部隊の次兄も被爆。そのうち下の姉は、八月十八日に死亡。本人は健康で、皆実町で夫と高校三年の娘、小学校二年の息子と四人暮らし。四十九歳。

天気がよく、とても暑い朝でした。八月六日、私はいつものように勤め先である皆実町の専売公社で仕事をしていたときです。地下室にある書類をとりに行こうと三階の渡り廊下を歩いていました。ピカッと光ったかと思うと、目の前が真っ暗になり、爆風に飛ばされ、つい立てにたたきつけられて意識を失ってしまいました。五分くらいたってからでしょうか。気がつく、「爆弾